

このごろはあまりに読まなければならぬものが多くて、ただ楽しみのためにだけものを読むということが、ほとんどできないのに閉口している。

しかし流行にはずれても困るので、週刊誌もひとつぐらいいざっと目を通すが、時々得るところのある記事に出会って、ハツとするようなことがある。この間『サンデー毎日』に出ていた岡潔先生の連載随筆を見ていると、ピカソの絵を「あれは無明を描いているんだ」と指摘しておられたのには、敬眼以外申す言葉もないのであった。

近ごろ前衛系の書というのを見ていて、時々ハテナーと思うことがある。人間の心に映るものの中に、既成の形式では写せないものもある。造形のジャンルよりも、むしろ音楽の世界などの方に、表現がしやすいかと考えるものもある。

それを何とか造形に凝結させるとすれば、こんなものにもなるのかなと考え、数年来そのような眼で見、いろいろと自分なりに考えてきて、これはこれなりにひとつの発達を遂げて、書でもない絵でもない、新しい心象芸術のジャンルが形成されるのではないかと思ったりした。

しかしそう見ることによってひとつ判ったのは、やはり心に把えた構想をよく練ったものと、単なるアイデアだけの、あるいは模倣のものとは何となく響きの違うことに気づいた。そして今、この分野に真剣に取り組んでいる人々にあらためて何か敬意を感じるようにもなり、同時にその作者の心の美しさがやつぱり必要であり、また格調の高いものは、自然それだけの鍛練を重ねてでなければ、本当に響くものになっていないことも判ってきたような気がする。

これからみると従来(しゆらい)の書の世界には、いくつかの造形に対する型もあり、またその方法論(ほほうろん)もほぼ体系を備えているから、なんとなくやっつけても一応(いちおう)それらしく見えるということになり、あるいは流行の書風などでは、ちよつとそんな調子を把えると、ひとかどの作

品らしさが備わって見えてくるのである。
書が素人の遊びとして、名士や何かが手軽く弄んで、世間がまたこれに同調して鑑賞価値があるように考えられているのも、ここに原因するのかもしれない。

私は書というものも、芸術の一部門として追求するとなれば、そんな生やさしいものではないと思う。美しいものを求める心の眼、その心の眼が把えた姿を具現するための技術の鍛練、この二つがみごとに磨かれてきて、初めて書の造形の美が構成されるんじゃないかと思う。

心だけで書が書けると思っている人、技術だけで筆耕のようにやっている人、あるいはアイデアでおどかしている人、自分を省みて、時々危ない情性だけの姿になりそうな自分に気づいて、独り汗顔の思いを繰り返している。

ピカソの天才をもつて、なお岡先生の叡知の眼で、あれは無明だけを把えていると看破されているのは恐ろしいことでありまた有り難い教訓であると感謝している。

そして光っているみごとな書作品に対し、何が故に光り、何が故に永い永い鑑賞にたえているかを考えずにはいられないのである。

〔乾惕〕、昭和四十年〕



『一燈無盡』昭和51年